

## 宇治島のサンゴ類の生息状況

塚原 潤三  
鹿児島大学理学部

### Corals in the infra-littoral zone at Utchima Island

TSUKAHARA Junzo  
Faculty of Science

#### 目的

宇治島（家島）は宇治群島（N31° 11'、E129° 27'）では向島につぐ大きさの島であり、周囲約2Kmである。現在は無人島であり、漁船や釣り人の立ち入りがあるのみである。人的な影響の非常に少ない離島のサンゴ群集の生息状況を調べる目的で、今回の総合調査に参加した。

#### 調査地域および方法

島の南西部には港が作られている。今回のサンゴ調査は調査時間の制限もあり、この港周辺のサンゴ群集の調査を行った。方法は当初コードラートによる定量調査も予定していたが、潮間帯域はスティーブであり、サンゴの生息が見られなかったので中止し、潮下帯（水深1～6m程）のサンゴ類の生息について、潜水視認による観察と水中カメラによる記録を行った。

#### 観察結果

港は防波堤やテトラポットに囲まれ、西側に20m程の出入り口がある。岸壁近くは工事の影響か、サンゴ類は全く見られなかったが、熱帯から亜熱帯海域に生息するマンジュウヒトデ (*Culcita*) が生息し、この海域が亜熱帯の環境をもっていることを実感させた。港の出入り口付近のテトラポットの内側は水深4～6m程で、イシサンゴ類がよく発達し、特にミドリイシ (*Acropora*) は場所により100%近い被度を示していた (図1)。他にキクメイシ (*Favia*, *Favites*) やハマサンゴ (*Porites*)、コモンサンゴ (*Montipora*) など多様なサンゴ類が生息している。次いでテトラポットの外側の外洋に面した地点で潜水観察したが、港の内側よりもより多様なサンゴ類の生息が見られた (図2)。しかし、サンゴ類全体の被度は、場所により大きく異なっていたが、50%を超えることはまれであった。

ミドリイシ類はどちらの海域でもテーブル状で枝も短く、この地域が波当たりがかなり強いことを示している。しかし、港の内側では枝がやや長い個体が多く観察されたことから、防波

堤やテトラポットによる消波効果が現れていると思われた。

ソフトコーラルでは、ウネタケ(*Lobophytum*)やカタトサカ(*Sinularia*)が多く観察された。また、潮間帯の岩盤の側面に形成されたマメスナギンチャク(*Zoanthus kuroshio*)の大きなコロニーが観察されたが、マメスナギンチャク類がこのような潮間帯岩盤の側面に生息することは、南西諸島では初めての観察例ではないかと思われる。

宇治島のサンゴ類は全体として非常に生息状況が良好であり、1998年に南西諸島のサンゴ礁海域で広範囲に発生した、サンゴ類の白化現象の影響は全く感じられなかった。また、南西諸島のサンゴ礁において、現在に至るまで長い期間にわたり広がっている、オニヒトデやレイシガイダマシなどによる食害も観察されず、また、ビブリオ菌などによる白化病の広がりも見られなかった。これは、宇治群島が南西諸島の連なりから離れた位置にある孤島の環境下であり、また、観察地が外洋に面するため海水温度の異常な上昇等の影響も全く無かったことによると思われる。このような素晴らしいサンゴの景観が今後も長く維持されることを期待したい。

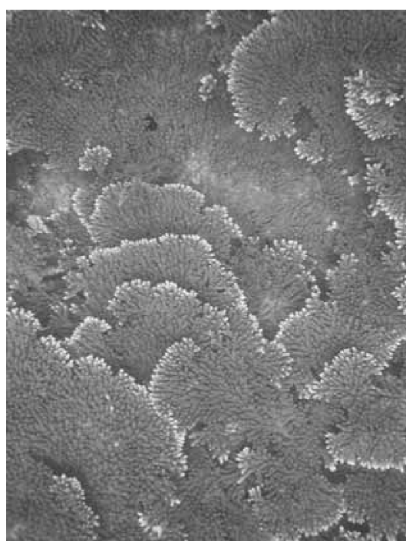


図1

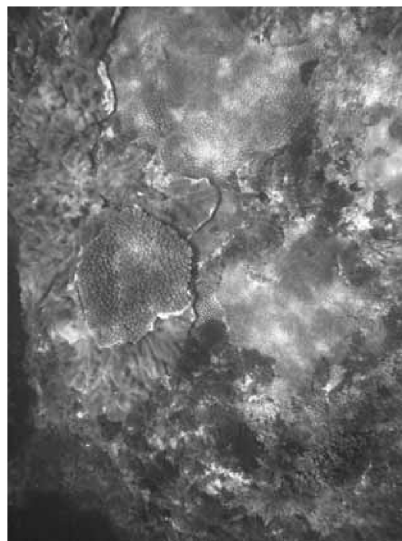


図2

図1：ミドリイシ類による被度が100%に近い海底の景観

図2：一つの岩盤にミドリイシ、キクメイシ、ウネタケなど多種のサンゴ類が生息している